



	<b>カリキュラム・ポリシーとは</b>
<b>定義</b>	ディプロマ・ポリシーの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施するのかを定める基本的な方針。

## 本学の「カリキュラム・ポリシー」

学校全体	<p>1.複眼的視座と幅広い知識を習得するために多様な教養科目を配置している。</p> <p>2.専門家としての知識・技術を身に付けるための専門科目を配置している。</p> <p>3.授業で習得したスキルを社会で活かせるスキルになるための汎用的スキルを教員が意識して授業に取り入れている。(プレゼンテーション、コミュニケーション、チームワーク、ワールドカフェ、KJ法などのスキル)</p>
子ども未来学科	<p>子どもの輝く未来を担う保育者は、子どもの発達に関する専門知識と技術、実践力を身につけ広い視野と豊かな感性を身につける必要があります。そのために次のような方針に基づいたカリキュラムを編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 基礎教養科目に基礎学力演習を設けることで、国語力はもとより専門学校での生活の在り方、生活の組み立てと見直し、コミュニケーション力の養成を図ります。</li> <li>2. 医療・福祉系の専門学校として、医療保育の専門的知識を身につけます。</li> <li>3. 障がい児保育に関する専門的知識と実践力を身につけ、その子どもの生涯に亘る成長・発達を援助する技術を身につけます。</li> <li>4. 地域社会や家庭との連携に関する科目を設け、保護者への相談・助言に関する知識・技術を身につけます。</li> <li>5. 学修した知識や技術を統合して創造力や探究心を育み、柔らかな感性と表現力を培います。</li> <li>6. 保育実習指導に力を入れ、指導計画の立案、模擬授業、実習事後指導での振り返りを行い、社会人基礎力を身につけます。</li> </ol>
介護福祉学科	<p>介護を必要とする幅広い多様な人々に介護福祉を提供できる知識・技術および態度を備えた介護福祉専門職を育成するために、下記の方針で教育課程を編成している</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎科目において、専門学校での学習の進め方、介護を実施するために必要な柔軟性を養う</li> <li>・こころとからだの仕組みに関する領域を学び、隣地実習において統合させる力を養成する</li> <li>・臨地実習を効果的に配置し、段階的にそして反復学習することにより介護の実践力の向上を図る</li> <li>・チームケア・感染防止・医療的ケアを学び、医療職・福祉職など多職種と協働・連携する力を養う</li> </ul>
柔道整復学科	<p>地域医療で活躍できる柔道整復師を養成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・医療専門職となる上での基礎知識と臨床的知識の育成</li> <li>・医療人としての認識の確立</li> <li>・専門教育と臨床実習等を通じて洞察力と応用力を育む</li> </ul>
作業療法学科	<p>作業療法学科では、保健・医療・福祉分野での様々な対象者に対して、多様なアプローチを用いた支援を行うことができる人材育成のため以下の様な教育課程を編成しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 基礎科目を設けることで、作業療法の実践に必要な豊かな人間性と倫理性、基盤となる資質や能力を身につけます。</li> <li>2. 専門基礎科目の学修を通して、作業療法学を自ら探求する動機づけと継続的に学習する習慣を身につけます。</li> <li>3. 分野毎の「評価学」「治療学」をそれぞれ2年次・3年次に配置し、科学的な根拠に基づいた評価や治療プログラムを構築し、臨床実習において活用・応用ができる知識と技術を身につけます。</li> <li>4. 「臨床実習」を各学年に配置し、年次毎の教育課程で学んだ知識、技能、態度と作業療法過程を、実習施設の指導者による指導を受けながら、臨床実践に適合した知識、技能、態度の統合を図ります。</li> <li>5. 「リハビリテーション工学演習」や「作業療法研究法」を通して、専門職として生涯学習の礎となる創造的思考力や自己研鑽力を身につけます。</li> <li>6. 課題への取り組み方や発表内容、提出資料なども評価の対象とし、単に知識の量や技術の正確さだけを習得するのではなく、質問や発言などの授業や臨床の場への主体的で積極的な参加ができる姿勢を身につけます。</li> <li>7. 世界作業療法士連盟の認定校の基準を満たす教育課程を編成し、国際化につながる視野を広げ、作業療法に対し国際的な関心を身につけます。</li> </ol>

教育課程の編成及び実施に関する基本的な考え方

1. 理学療法士に必要な知識、技術の教授と理学療法士に求められる態度の育成

最初に理学療法士に求められる情意領域(興味・関心・意欲・態度)について学びます。医療従事者に必要な常識や社会性とは何かについて具体的に説明を受けます。並行して、1年生では医療専門職に必要な基礎的分野の知識について受講します。例えば解剖学、生理学、病理学、運動学などです。続いて2年生では、理学療法専門分野の知識・技術を受講します。3年生ではさらに専門的な疾患別、具体的な症例を通して評価・治療の流れについて学びます。それまでに学んだ知識と技術は3年生の終盤に実施される評価実習、4年生の臨床実習で統合・応用され、臨床家としての実践力を身に付けます。最後に4年間の総復習として卒業試験、国家試験対策が行われます。

2. グループ学習、実技演習を通して他者と協力し、積極的に参加することの重要性とその効果について学ぶ

理学療法の臨床現場では医師をはじめとした他職種とのチームアプローチが展開されます。症例を通してのカンファレンス、目標を共有する密な情報交換は、リスク管理と効果的な医療の実践に必要不可欠です。一人の力では解決できない問題も複数の知恵を結集すれば正解に辿りつけるという成功体験がグループ学習からは期待されます。

3. 情報収集能力を養い、自らの課題を見つけ出し、深く思索し、的確に判断し、解決する能力を身に付ける

医学や理学療法専門分野の知識・技術の発展には目覚ましいものがあります。そのため、理学療法士は常に新しい知見の情報収集、技術の習得が求められます。本邦の理学療法は約50年前にアメリカから取り入れられたものです。したがって最新の情報はほとんど英語で発信されます。日本語のみならず英語の文献・本からも情報収集ができれば、時代の進歩に取り残されることはありません。そのためには、知的好奇心を常に持ち、広い分野から最新の情報を収集する能力が必要です。そしてさらに収集した情報を客観的に分析・判断し、臨床に応用できる実践力を養います。これらの能力は学習到達度に合わせたレポート課題や症例研究等で身に付けます。

4. 実践的臨床体験を通して、系統的評価と治療すなわち臨床的推論の過程を学ぶ

臨床実習に参加する前に、客観的臨床能力試験(Objective Structured Clinical Examination: OSCE)により、臨床で必要とされる知識、技術と態度が評価されます。その試験に備えたグループ学習では臨床実習で担当が想定される疾患・障害についての徹底的な実技練習と指導教授を実施します。3年生の評価実習、4年生の臨床実習では、今まで学習した知識・技術を統合し応用する能力を身に付けます。系統的評価により症状・徴候・障害の原因を推論し、主要な問題を抽出し、その解決策としての治療プログラムを立案・実施し、その効果を検証します。この一連の過程を臨床的推論と呼び、理学療法士が自立して評価・治療を行い、治療効果を得るために必要不可欠な技術と認識されています。

理学療法学科